

本キットに用いられている ACTH 抗血清は GH, Insulin, LH, FSH とまったく交叉しなかった。高濃度の ACTH を含有する血漿を段階的に稀釈した場合、その % Bound は標準曲線によく一致した N 回収率試験では平均回収率は 120% であった。本測定系の測定感度は 25 pg/ml と 50 pg/ml の間にあり、十分臨床応用が可能と考えられた。次に測定値の再現性をみると、同一 assay 内で 5 回測定した intrassay での変動係数は、7.8 ~ 11.1% であり、日をかえて 4 回測定した inter-assay での変動係数は 9.0 ~ 20.6% であった。また、トラジロールを加えて保存したところ、変動係数は 4.1 ~ 13.6% とより良好な再現性が得られた。

正常対照者 10 名の午前 9 時の血漿 ACTH 濃度は 60.7 ± 13.5 pg/ml で、午後 5 時の測定値は低下しており、また、汎下垂体機能低下症で低く、副腎全摘術後患者で非常に高値であった。また、メチラボンテストを施行した神経性食思不振症 2 名で、有意の上昇を示した。

以上、本キットは特異性、再現性ともに良好で、よく内因性 ACTH を反映しており、測定感度は 25 pg/ml と 50 pg/ml の間で A 十分臨床応用ができると考えられた。

31. 新しい血中アルドステロン定量法（ダイナボット）の検討

大塚 昭男 酢谷 忠夫

(京都第 2 赤十字病院・内)

芥屋 俊雄

(同・RI 検査室)

従来の血中アルドステロン定量法は、抽出、分離、手技の複雑さから routine 使用されにくい一面があった。今回、抽出操作なしに直接、血中アルドステロン測定可能なダイナボット社製のアルドステロンリアキットを使用する機会を得、若干検討を試みたのでその使用経験を報告する。測定法の概略は標準アルドステロン溶液 (0, 50, 100,

200, 400, 800, 1600 pg/ml) ならびに血清サンプル 0.1 ml に ^{125}I -Aldosterone 液 0.1 ml, 抗アルドステロン家兎血清 0.5 ml を加え 4°C , 16~24 時間、あるいは室温、3 時間 incubate 後、25% PEG 液 1 ml を加え振盪混和、遠心分離後沈澱をカウントし沈澱 % (抗原抗体結合物) を測定した。得られた標準曲線は 4°C 20 時間 incubation 法が、室温 3 時間法より感度が高く、再現性においても前者が優れていた。Aldosterone free 血清に標準アルドステロン溶液を添加した回収率は 89.5 ± 6.6 % (mean \pm SD), 正確度は $y = 0.85x + 3.98$, 相関係数 0.99 と良好な結果を得た。また、プール血清に添加した回収率は 94.4 ± 16.9 % と計算上予測された数値に近く回収された。同一の Kit で各被検血清を 2 回宛定量した intra-assay variability は 8.1% と良好であった。また、各被検血清を 2 組の異なる Kit で 2 回ずつ定量した inter-assay では多少のバラツキがみられたが相関は良好であった。被検血清はフリーザー -20°C で保存しているが凍結、融解の回数が 4 度を超えると測定値が低下するため分割して保存する必要がある。本法による正常者の測定値は 55.8 ± 24.2 pg/ml であり、原発性アルドステロン症 2 例では 300, 350 pg/ml, idiopathic hyper-aldoosteronism の 2 例では 210, 110 pg/ml の高値を示した。本法は操作が簡単であり、臨床を主とする病院、施設にとって優れた測定法と思われる。

32. ^{125}I を用いた Radioimmunoassay による血中 Aldosterone 濃度の直接測定法

石原 静盛 金尾 啓右

本田 稔

(住友病院・アイソトープ室)

宇佐美暢久 成田 充啓

栗原 正

(同・内)

今回、われわれはダイナボット社より提供された ^{125}I 標識アルドステロン測定キットを用い血中